

## 『わが母』と家族-神学

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2013-05-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩野, 卓司 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/14848">http://hdl.handle.net/10291/14848</a>

## 『わが母』と家族-神学

岩 野 卓 司

### はじめに

晩年のバタイユは、多岐にわたる自分の思想を分類し体系化することでそこにある秩序を与えようと試みた。『内的経験』、『有罪者』、『ニーチェについて』からなる『無神学大全』という哲学と神学における三部作や、『呪われた部分—消尽』、『エロティシズムの歴史』、『至高性』の経済三部作と並行して、小説の分野では、『マダム・エドワルド』、『わが母』、『シャルロット・ダンジェルヴィル』の三部作が構想された。ガリマール版バタイユ全集では、第四巻の編纂者タデ・クロソフスキーが『神的なる神 (Divinus Deus)』の総題のもとでこの三部作を纏めあげている<sup>1)</sup>。これらの小説はいずれも、ピエール・アンジェリックの自伝という形をとっている。バタイユが執筆した順番は、『マダム・エドワルド』、『わが母』、『シャルロット・ダンジェルヴィル』であるが、小説の中の年代では、母が息子のピエールに放蕩の手ほどきをする『わが母』が最初で、シャルロットとの放埒な生活がその後につき、最後にエドワルドと出会うことになる<sup>2)</sup>。どの作品でも、女性の主人公は、気違いじみたほど墮落した女性で、語り手のピエールはそこに神々しいものを見いだす。エドワルドは「神」<sup>3)</sup>であり、母は「神」<sup>4)</sup>に似た者であり、シャルロットは聖女のような幻視者<sup>5)</sup>なのだ。三部作に属している『わが母』は、『マダム・エドワルド』と同じ「神性」、すなわち気ちがいじみたエロティシ

ズムにおける神性に光をあてている。母と息子の近親相姦を語るこの物語において、神性はどのような問題を提起しているのだろうか。

## 1) 神性と女性の価値の曖昧な転倒

まずは『わが母』が神性と女性についてある価値の転倒を証言していることからこの論考をはじめてみよう。この転倒は仔細に検討してみれば一筋縄ではいかないように思われるが、家族と神の二つのテーマに即してこの転倒の構造に焦点をあててみよう。

### A) 神性の変容

小説の冒頭では、ピエールは「純潔の神」<sup>6)</sup>に熱心な信仰を抱いており、それは将来神父になるのを夢見るほどであった。しかし、物語が進むにつれて、彼の抱く母親のイメージが変化していくのにもない、神のイメージも変わっていくことになる。物語の最初のほうで父が死んだあと、母の敬虔なイメージが揺さぶられ動揺したピエールはこう告白している。「私の感じる嫌悪感の深みのなかで、私は自分が『神』に似ていると感じる」<sup>7)</sup>。純潔の神は徐々に罪深い神に変わっていくのである。そこから、純粹から不純に、道德的禁欲から欲望の過剰に、キリスト教の神から神的なるものに価値が移っていくのである。一見すると、『わが母』は、よき神から呪われた神性への変容をもって終わるように見えるかもしれない。しかしながら、こういった変容も完全に脱キリスト教を成功させることができたかと言えば、事はそれほど単純ではない。神性の変容しても、キリスト教の要素は完全には払拭されていないのだ。ピエールはこう語っている。

それで私は、神性について抱いていたイメージをアンシーの愛欲のイメージに結びつけ、その全能と恐怖が終わらないものであるあの不浄なもの

にこれらのイメージを結びつけたのだ。まだ敬虔であったころ、私は十字架のキリストとその傷の汚らわしさについてよく思いを巡らせたものであった。みだりに快樂にふけた結果もたらされる哀願するような嘔吐感のせいで、私は狂気に至らないような感情はもはや存在しないあの恐るべき混合物へと開かれていた<sup>8)</sup>。

十字架に磔にされたイエスの傷の生々しい穢れは、法外なエロスの欲望がもつ不浄さに応答しているのだ。エロスの狂気に至る暴力的な神性はキリスト教道徳の限界を超え出るのであるが、それと同時にまたこの宗教の深みをも指し示している。それはキリスト教の神の概念の裏側には位置していない。その対蹠点にありつつも、この神と二重化しているのだ。ピエールはまたこう述べている。「私の母の怪物のような不浄さ、それと同じくらい嫌悪をもたらす私の不浄さは、天にむかって叫んでおり、完全な闇だけが光に似ているように、二人の不浄さは神に似ているように思われる」<sup>9)</sup>。母と息子の不浄な放蕩のなかで、光り輝く神は凌駕され同時に闇であることを強いられるのだ。ここから神的なものの両義性が生じる。浄と不浄、キリスト教と非キリスト教、高貴と卑俗、光輝と闇、等。『マダム・エドワルド』の中に見出される両義的な神的な神はまた『わが母』の神性もまた特徴づけているのだ。

## B) エレーヌの女性中心主義

ピエールが母であるエレーヌに神性を認める限り、神的なものの両義性は、彼女の行動や思想に大きな影響を及ぼしている。どういう影響が問題なのであろうか。女性ということに関する価値の転倒を考えることから始めてみよう。

まずは夫婦間の権力関係の転倒について。子供のころを森の中で自由に暮らしていたエレーヌは、ある日将来の夫になる男に犯され、妊娠し、出産す

る。そしてこの男と結婚するが、性的関係を持つことを拒み続ける。エレヌはこう説明している。「結婚した最初の日から一度だって側に寄せなかったわ。あの人はお酒を飲み始めたの。無理もなかったわ。私によくこう言っていたわ。『俺の生きている悪夢を誰も信じてはくれまい。お前に目をくりぬかれたほうがよかった。』あの人は獣のように私を欲しがったわ […]」<sup>10)</sup>。白い結婚という手段を用いて、エレヌは夫を墮落させ、夫婦の間の権力を握る。彼女はこう語っている。「毎晩新しいお祭りのための人たちを確保しなければならなかったわ。それから、お父さんをぶったの。他の人たちの前でぶったの。飽きることなくお父さんを辱めたわ。あたしはあの人に女の服を着せたわ。道化の服を着せたわ。それであたしたちの晩餐よ。あたしは獣のように生きていたわ。お父さんに関してだと、あたしは際限なく残忍になったの」<sup>11)</sup>。放蕩の世界では日常の秩序が逆転しており、女性が権力を握っているのである。家族の秩序における男性中心的な価値観はここでは崩壊している。

次に女性の優越。エレヌはレアやアンシーのような女性を愛し、レズビアンの世界にひたりながら、こう語っている。「[…] きれいな女性とだったら、あたしは難なく楽しめるし、だからこそ不安にかられることもない。あたしの心は和らぐの」<sup>12)</sup>。なぜなのだろう。レズの世界は、彼女がただ一人生きた森の世界への回帰だからである。エレヌはピエールに自分の過去をこう打ち明けている。「あたしはひとりでいるほうを好んだわ。森のなかでひとりぼっちだったの。森のなかで裸だったわ。素っ裸で、鞍もつけずに馬を乗り回したわ。[…] おまえは森の葉むらから生まれたのよ。あたしの楽しんだ湿り気から […]」<sup>13)</sup>。腐食した落ち葉の群れの湿り気はたぶん女陰の陰毛の湿り気を連想させるだろうから、バタイユによれば男性よりも女性に近いものになるのであろう。だから、レズビアンであることは、エレヌに自体愛のような森の生活を思い出させるのであろう。

こういった視点から見ると、男性的なものは反対に秩序と結びついている。

未来の夫に犯され、彼女は家族という秩序のなかに組みこまれる。自由は制限され、秩序の中で生きなければならないのだ。だから、彼女は男性的なものを拒み、男を愛さない。ピエールは言う。「[...] 一度たりとも母は男を愛さなかった。アンシーが僕を愛した意味で彼女が僕を愛することは一度もなかった」<sup>14)</sup>。夫であろうと、息子であろうと、愛の対象であることから遠ざけられているのだ。彼女は自分を愛する男を墮落させ秩序を破壊することしか望まない。エレーヌは次のように告白している。「あたしは自分を愛してくれる人をみんな不幸にするの。だから、私は女性に快楽を求めるのよ。女性なら冷淡に利用できるの」<sup>15)</sup>。彼女の暴力性と森への回帰の欲望は、男性的な秩序を破壊することしかしないのだ。

シャルロットの証言によれば、エレーヌはいつも女性であることの優位について語っていた。

[...] [エレーヌ] は、女性であることに幸せを感じているとよくあたしに言っていたわ。女性で、とくに美しく金持ちであれば、恥辱を恐れず反対に恥辱に快楽を見出すのなら、挑発的に生きることができるからだって<sup>16)</sup>。

男性に対する女性の優位は、夫に対する妻の優位と結びついているのであろう。白い結婚、性的放縦、レズビアニズム、男性的秩序の破壊、こういったものたちは、女性の優位を支える価値転倒を物語っているのであろう。

しかしながら逆説的なことだが、女性の優位、レズビアニズム、男性の排除は、女性の男性化を招くのではないのだろうか。エレーヌの女性中心の考えは、受動性という意味で女性化されないということにある。それは、彼女が常に贈与者であるという事実において明白である。夫と性的関係を持つかわりに、彼女は彼に女性を与えるのだ。「[...] あの不幸な人にも何か恵んであげようとすぐに考えついたわ。これは規則正しい生活なんかあたしが嫌い

だからよ。破廉恥な行動になったわ。あの人を部屋に入れ参加するように求めたわ。分かる。よくあたしが二人の娼婦といっしょに戻ってきたでしょ。一人はお父さんとやり、もう一人はあたしとやるの」<sup>17)</sup>。夫婦において決定を下し、与えるのはエレヌのほうである。だから、夫は受動的になり、女性化され、去勢させるのだ。夜の宴では、彼女は夫に女性の服を着せるのだ。「あたしはあの人に女の服を着せたわ。道化の服を着せたわ。それであたしたちの晚餐よ」<sup>18)</sup>。小説の最後の場面では、彼女は夫が男性であることを否定するようなことを言う。

おまえの意気地のない父親について言っているときではありません。あれでも男だったのかしら<sup>19)</sup>。

夫を無力にし女性化することで、ピエールの母は男性化する。というのも、彼女は夫や異なる登場人物に対し常に贈与する立場をキープしているからである。ピエールに対する彼女の贈与は、墮落の教育である。そこでは、彼女は彼にレア、アンシー、彼女自身、さらには彼女の中でもっとも貴重なものを贈与している。彼女はこう告白している。

おまえの墮落は、あたしの仕業です。あたしは自分のもっているもっとも純粹でもっとも暴力的なもの、あたしに服を引き裂かせるものしか愛さないという欲望を、お前に与えました<sup>20)</sup>。

エレヌは“男性的”であり、自分を愛する者たちから決して贈与される存在にはならない。レアとアンシーというエレヌの二人の愛人に関しても同じである。エレヌは彼女たちに対しても贈与する者なのである。まずはこの二人にピエールを与える。また、金銭も与える。というのも、エレヌは金持ちのブルジョワであるが、レアは踊り子であり、アンシーは高級娼婦

だからだ。贈与する者として、彼女は太陽に似ている。というのも、バタイユのお気に入りのイメージの太陽は、報酬を受け取ることなく贈与することしかしないからである<sup>21)</sup>。その上、太陽が男性性の象徴であることは広く知られている<sup>22)</sup>。確かに、ピエールの母は女性であることの特権をうまく使っている。しかし、彼女が女性であることを強調すればするほど、彼女の男性性が浮き彫りになってくるのである<sup>23)</sup>。

エレヌの女性中心の考えは、夫/妻、男/女のヒエラルキーを転倒しているように思われるが、また同時に優位にたつ妻や女性が男性化の契機をはらんでもいるわけである。逆転して肯定的な価値をもつものは同時に劣位にあるものの価値を併せもっているのではないのだろうか。男性中心の考えから女性中心の考えへの移行は、一見すると単純な逆転のようにも見えるが、よく考えてみると、そこには両義的な性格が読み取れる。それはちょうど、純粹と不純、生と死、光と闇、高貴と卑俗、善と悪といった両義性を孕む神的なものと同じだと言えよう。

## 2) 家族と単為生殖

神的なものの両義性や女性的なものの両義性は、『わが母』の中では、家族とかかわっている。エレヌが母であるという事実は、彼女がバタイユの他の小説の女性主人公と異なっていることを示している。『眼球譚』のシモーヌ、『青空』のダーティ、『C 神父』のエポニーヌ同様に、エレヌもエネルギーで攻撃的であるが、母であるという一点でこれらの登場人物とは一線を画している<sup>24)</sup>。母と子の激しい愛は神的なものと家族的なものとの密接な関係を浮かび上がらせている。

家族の関係は『わが母』では二つの段階に分けることができる。まずは父が生きていた時。ひとりの男によって強姦されたエレヌは、子供を身ごもり出産し、この男と結婚するが、性的関係の拒否と放縦な生活によって夫を



辱めることで復讐する。出産と結婚は家族関係と言う秩序を形成し、彼女は  
そのなかに神的な無秩序をもたらす。だが、息子の前で良い母親を装うよう  
にとの契約を夫と結んでいたので、彼女はピエールにこう告白する。「お父  
さんがあたしをまっとうな道に引きとどめていたのよ」。だから、結婚と家  
族の秩序は破壊されることなく維持され、無秩序は秩序のなかで隠蔽される。  
ここでは家族的なものと家族破壊的なものが共存している。第二段階は、父  
親の死後に訪れる。夫が死んだことで契約は無視され、エレヌはそれまで  
抑圧してきた欲望をさらけ出すようになる。「父が死んだから、取り決め  
に従うのが耐え難くなってしまったのだ。それに続く心の乱れの中で、彼女  
は私の目に不潔に写るよう振る舞いたいという誘惑に屈してしまった。それは  
彼女が自分を放棄するたびごとにあるがままの自分を示したがついてい  
るようであった」<sup>25)</sup>。彼女の中の神的な暴力が家族の枠組みを越えてしまうのだ。  
エレヌはピエールと近親相姦の関係になり、自殺してしまう。かくて、家  
族の秩序は崩壊してしまう。このエレヌの神性は、彼女の愛人であるレア  
とアンシーとの対比の上でくっきりと浮かび上がる。というのも、ともに放  
蕩に耽ったとはいえ、レアはエレヌの自殺のあと自らの罪におびえ神の救  
済を求めて修道院に入り、アンシーは結婚し最終的には家庭の平穏な秩序に  
満足してしまう<sup>26)</sup>。エレヌの暴力的な破壊とは異なるのだ。彼女の神性が  
家庭の秩序を崩壊させているとはいえ、それでも母と子の関係は『わが母』  
では常に前提にされている。神的な狂気が高まるのは、母と子の禁じられた  
関係を通してなのである。この点『エロティシズム』の中でバタイユが言及  
している通り、禁止は侵犯への欲望を高めるのであり、禁止と侵犯とは相互  
補完的であり、エレヌとピエールの関係はその模範的な例であると言えよ  
う。そして、今ここで問題なのは、神的な過剰が近親相姦の禁止と侵犯をめ  
ぐる家族関係と切り離せないということである。秩序の破壊をもたらすもの  
は、家族的であるとともに非家族的ないしは超家族的でもあるのだ。このよ  
うに考えてくると、父、母、子のこの関係に、フロイトの精神分析の中核に

あるエディプス・コンプレックスの理論を適用したいという誘惑にかられるかもしれない。ピエールの父親への反感、彼の母への愛は、近親相姦の関係は、運命のなすがままに父を殺し母と寝たオイディプスの逸話の現代版ともとれるであろう。無意識における家族の秘密は、精神分析が解き明かすエディプス・コンプレックスともとれるであろう<sup>27)</sup>。今までいろいろと指摘してきた、一連の二重性は最後にはエディプスの三角形に還元さされてしまうのであろうか。そうなると『わが母』の中央には、このコンプレックスがどっかりと腰を下ろすことになるであろう。だが、本稿ではこの仮説をとる気はない。『わが母』が示そうとしているものは、家族の三角形に収斂しないものだと思われるからである。それはひとつには、バタイユが理論においてエディプス・コンプレックスを信奉している者ではなく、「フェードル・コンプレックス」を主張する者だからである。ラシーヌの名作の中でフェードルは義理の息子イポリットに道ならぬ恋心を抱いてしまうが、バタイユは罪深い関係における性的欲望に関心を寄せている。『エロティシズムの歴史』の中で、彼はこう述べている。「この罪はフェードルを恐れ慄かせるが、彼女の抑えがたい熱情を秘密裏に育てている」<sup>28)</sup>。ここで重要なのは、家族の関係の特権ではなく、禁止が侵犯の欲望を挑発するという一般的な原理である。近親相姦ですらその一例に過ぎない、禁止と欲望の関係をバタイユはここで示しているのではないのだろうか<sup>29)</sup>。

もう一つの理由は、『わが母』のテキスト自身に隠されている。なぜエレーヌはピエールを愛するのであろうか。なぜ彼女は彼を放蕩の方へと誘うのであろうか。なぜなら、彼は彼女の分身、森の中の彼女自身の分身だからである。エレーヌは息子に彼が森の喜びと不安から生まれたと告白している。

— ピエール！ おまえは父さんの息子ではありません。あたしが森で抱いた不安からなる果実なのよ。あたしが森の中で裸であり、獣のように裸であったとき、震えることを楽しんでいたとき、あたしが感じた恐

怖から生まれたの。ピエール、あたしは腐った枯葉のうえを転がりまわり、何時間ものあいだ楽しんでたわ。おまえはこの楽しみから生まれたのよ<sup>30)</sup>。

ひとつの幻想が問題なのであろう。ここでは、エレヌはピエールを、母の子、もっぱら母親からのみ生まれた者と解釈している。息子は父と母の性交の結果ではなく、母の純粋な分身に他ならない。彼女がピエールを愛するのは、彼女が彼に欲望の対象としての男を見ているからでなく、森の激情の果実を見出すからである。ピエールは次のように述べている。

母にとっては、私は森の子であり、前代未聞の愛欲の果実なのだ。この果実を彼女は子供っぽい献身の中で育んできたのだ。それは不安で陽気な気ちがいじみた優しさが戻ってくることなのであるが、彼女はこの優しさをめったに与えなかった。しかし、それは私を幻惑した […]。 […] 彼女が愛したのは、いつも自分の腹を痛めた子であり、自分が愛したであろう男の姿を私に認めるほど彼女と相容れないものはなかった<sup>31)</sup>。

単為生殖の幻想の故に、エレヌはピエールを愛する。それと同じように、ピエールはエレヌを愛している。この特異な愛を「愛なき愛」とも呼ぶこともできよう。そのことはピエールの次のようなデリケートな告白が語ってくれる。「私は母を熱愛していたが、愛してはいなかった」。あるいは「アンシーが私を愛した意味では、母は一度も私を愛したことはなかった」<sup>32)</sup>。しかも、狂気は彼らの愛の特徴をなしている。「私は彼女と狂気を分かち合っていた」<sup>33)</sup>。分身どうしの愛は、通常のアプローチを越えて、愛と非-愛の二重性を示している。この小説が提示する母と子の関係はエディプスの三角形には還元されない。この三角形に先行する分身の論理もまた重要なのだ。『わが母』は父と息子の諍いの物語でも、近親相姦の物語でもない。分身としての母と

分身としての息子の物語に他ならない。これまで指摘してきた他の二重性——純粹と不純，光と闇，男性と女性，家族と非家族，愛と非-愛——は，最終的にはこの関係に結びついている。この小説が告げているのは，エディプス的な近親相姦ではなく，多岐にわたる二重性の連なりなのではないのだろうか。

分身の考えは、『不可能なもの』の中のディアヌスとアルファの関係や『C神父』の中のロベールとシャルルの関係の中にも見出される。前者は兄弟であり，後者は双子である。それぞれの小説で，二人の関係はそのライヴァル意識の故に互いに同時に愛し合いかつ憎しみ合っている<sup>34)</sup>。彼らの葛藤は，父や母への関係から来ると言うよりも，彼らが類似している，もしくは二重化した分身どうしだからである。ここでは家族の三角形に先行する分身の関係が問題なのだ。『わが母』における母と息子はこれらの小説の中の分身たちに類似している。バタイユが強調したいのは，親子関係や兄弟の関係を束縛する血のつながりではない。彼が『至高性』の中で「兄弟」という語を使うとき，彼はそこに「血の絆」ではなく，「同じ本性の絆」を見ているのだ。兄弟はその本性において互いに類似しているのだ。バタイユは「兄弟」という語で主体と客体の関係ではなく，主体と主体の関係を了解している。ここでは他者を物の地位にまで貶めるのではなく，そこに主体を見出すことが重要なのである。バタイユは次のように説明している。「[...]しかし，彼が私の兄であると私が言う場合は，私であるこの主体に彼が似ていると確信しているからである。その結果，私にとって最初に現れる主体と客体の関係を私は否定する。そして，私が否定したことで，兄と私の間の，主体と主体の関係が明確になる。この関係は最初の関係を破棄するのではなく凌駕するのだ」<sup>35)</sup>。決して客体化されない至高の主体は，近代哲学の主体とは異なる「主体なき主体」である。類似の関係は，起源と派生，オリジナルとコピーという秩序を無視する関係である。『不可能なもの』も『C神父』もまた血の関係を越えた起源をもたない類似を提示している。『わが母』の場合も同

じである。確かにこの中編小説は、親子という血の論理と、起源と派生あるいはオリジナルとコピーという関係を前提にしている。しかし、よく考えてみると、エレヌとピエールに共通の単為生殖の幻想が示すように、血の関係はあまり重要ではない。彼らの愛は、起源である母親と派生したものである息子の関係にも、オリジナルである母とコピーである息子の関係にも由来しない。彼らが愛し合うのは、彼らだけが別の世界に所属しているからである。ピエールは言う。「母と私を結びつけている愛は、別世界に属していた」<sup>36)</sup>。エレヌがピエールを愛し教育をするのは、彼女とその息子がこの別世界の住人だからである。ピエールがエレヌから生まれたのは本当である。しかし、彼らの愛、彼らの分身の関係は、この事実に起因するものではない。そうではなく、「別世界」に属しているからである。「別世界」による彼らの関係は、「主体」と「主体」の関係であり、起源たる母と派生したものととしての子供の関係、オリジナルとしての母親とコピーとしての子供の関係に先立つのだ。エレヌやピエール同様に、シャルロットもまたこの世界に属している。「[...] シャルロットが母と同じように属している世界では、愛欲と死が同じ威厳をもっており——が同じ下劣さももっている——、同じ暴力をもって同じ優しさも持ち合わせている」<sup>37)</sup>。別世界の愛がエレヌ、ピエールとシャルロットの間の絆であり、ピエールとエドワルダの間の絆でもあるのだ。彼らがみな他なる世界の住人である限り、互いに分身の関係にあるのだ。分身どうしは決して自らをオリジナルともコピーとも規定することなくお互いに結びついているのだ<sup>38)</sup>。

#### 《注》

- 1) 「神的な神 (Divinus Deus)」は『マダム・エドワルダ』の仮扉にあるだけではない。バタイユの構想したプランのひとつでもある。「——草稿 1, 1-112 頁: 神的な神—— I. マダム・エドワルダ (草稿の写し), 21-137 頁。II. わが母 (新しく起草した草稿 11-86 頁。われわれのテキスト 175-259 頁)」(O. C., IV, notes par l'éditeur, p. 387. なおバタイユの著作の略号は以下の通り。O. C.:

*Œuvres complètes*, I-XII, Paris, Gallimard, 1970-1988; *M. E.: Madame Edwarda*; *M. M.: Ma mère*; *H. E.: Histoire de l'érotisme*; *L. S.: La Souveraineté*.) ただし、「神的な神」という総称はバタイユのプランのひとつでしかないということは忘れてはならない。とは言うものの、このタイトルが自らの枠組みを超え出ていく神を表現しているという点で、三部作の内容に合致していることはまた否めない事実である。

- 2) *Ibid.*, p. 394.
- 3) *M. E.*, O. C., III, p. 21.
- 4) *M. M.*, O. C., IV, p. 203.
- 5) *Charlotte d'Ingerville*, O. C., IV, p. 284. これらの神的な女性を物語るピエールは受動的で副次的な存在である。彼は母から淫蕩の教育を受け、シャルロットが語る話に耳を傾け、エドワルダの命令に従って最後には運転手と彼女との性交の手助けまでしてしまう。アンジェリックというピエールの苗字が天使を暗示するように、彼は神や神的なものを助ける存在なのではないのだろうか。
- 6) *M. M.*, O. C., IV, p. 257.
- 7) *Ibid.*, p. 187.
- 8) *Ibid.*, pp. 258-259.
- 9) *Ibid.*, p. 203.
- 10) *Ibid.*, p. 221.
- 11) *Ibid.*, p. 223.
- 12) *Ibid.*, p. 222.
- 13) *Ibid.*, p. 217.
- 14) *Ibid.*, p. 235.
- 15) *Ibid.*, p. 217.
- 16) *Charlotte d'Ingerville*, O. C., IV, p. 291.
- 17) *M. M.*, O. C., IV, p. 223. 多くの研究者がこの小説の教育的な側面の重要性を強調しているのは正しいと思う (S. Alexandrian, «Georges Bataille et l'amour noir», in *Les libérateurs de l'amour*, Éd. du Seuil, 1977, p. 276, M. Surya, *Georges Bataille, la mort à l'œuvre*, 2<sup>ème</sup> édition, Gallimard, 1992, p. 536, G. Philippe, «Ma mère. Notice», in G. Bataille, *Romans et récits*, Gallimard, Bibliothèque de pléiade, 2004, p. 1302.). 特に三島由紀夫が「教養小説」と比較しているのは興味深い (Y. Mishima, «Essai sur Georges Bataille», *La nouvelle revue française*, no. 257, avril 1974, pp. 79-80). ただ、こういった教育もエレヌにおける贈与の一形態なのではないのだろうか。
- 18) *M. M.*, O. C., IV, p. 223.
- 19) *Ibid.*, p. 236.
- 20) *Ibid.*, p. 276.

- 21) 拙著『ジョルジュ・バタイユ — 神秘経験をめぐる思想の限界と新たな可能性 —』, 水声社, 2010年, 特に第3章「科学の優位 — 『普遍経済』と太陽の贈与」を参照のこと。
- 22) フロイトはこう述べている。「[...] 太陽は父親の昇華された象徴以外の何物でもない」。(S. Freud, 《Psychoanalytische Bemerkungen über einen autobiographisch beschriebenen Fall von Paranoia (Dementia Paranoides)》, in *Zwei Fallberichte*, Frankfurt am Main, 1977, S. 143)。
- 23) バタイユの小説における女性の表象を特権化しながら, ジェル・グルートは女性のイニシアティヴを重視する。「バタイユほどポルノグラフィックなものや暴力に取りつかれた作家の作品に, 女性への攻撃がほとんど見当たらないのは, 驚くべきことである。そのかわり, 女性は放蕩の中でしばしばイニシアティヴを取っている。[...] / [...] 女性の至高性は『わが母』の中に見いだされる。母親なる登場人物が, 書物の冒頭では敬虔であった語り手を [...] 「墮落」させるのだ」(G. Groot, 《Le théâtre féminin dans l'œuvre fictionnelle de Bataille》, *Crin* no. 25, 1922, pp. 110-111)。しかし, 女性はこの「女性の至高性」の中で男性化していないのだろうか。
- 24) もうひとつの違いは教育という役割にある。エレヌだけが悪の手ほどきをする女性なのだ。サラヌ・アレクサンドランはこう説明している。「ひとりの教育者である聖女, つまり, (他の聖女たちが望まずに男に悪の聖性の手解きをしているのに) 望んで男にそうする聖女について考えてみなければならなかった。『わが母』では, この異様な人物の全身が描かれている」(Alexandrin, *op. cit.*, p. 276)。ミシェル・シュリヤは次のように説明している。「[...] バタイユが創造する聖女の最後の者であるエレヌは, 先立つ聖女たち全員の一種の原型であるのだろう [...]。[...] 手ほどきを与えるエレヌ (母) は, ディアヌスがひとりの女性を通して女性たちにエロスの教理を教えたのと同じように, 男たちにそれを教えるのだ」(Surya, *op. cit.*, p. 536)。
- 25) *Ibid.*, p. 185.
- 26) レアについては次のように書かれている。「母が自殺したあと一年を経てレアがあわててかけ込まなければならなかったカルメル会が背景にはある。幸せなレア。彼女の前には逃避の場所が開かれていたのだ。この物語はそこには向かわない。そこから逸れていくのだ…」(*ibid.*, p. 225)。アンシーについても以下の描写がある。「アンシー, 私が長い間 — 満たされた幸福の中で — 一緒に暮らすことのできたただ一人の女性。私の母はアンシーを悪い道に走らせようとしたが無駄であった。私たちが別れた後, 彼女はすばらしい男性と結婚した。この男性は私も知っている人物で, 彼女に幸せな安定した生活を与えてくれた。彼女は子供をひとりもうけるが, この子を見るたび私はかならず喜びを感じるのであった」(*ibid.*, p. 233)。

- 27) S. Freud, *Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse und neue Folge, Studienausgabe*, Band 1, Frankfurt am Main, S. Fischer, 1994.
- 28) *H. E., O. C.*, VIII, p. 88.
- 29) ジル・フィリップとジル・エルンストは『わが母』の読解に「フェードル・コンプレックス」を適用することを正当化している。フィリップはこう書いている。「『わが母』の深い意味をその著者の幻想的な体制の中で解釈しようとする者たちにとって、『エロティシズムの歴史』の中の「フェードル・コンプレックス」の下りは多くを教えてくれる。そこでは最終的に、タブーと近親相姦というよりはむしろ、死体と死体が生者にもちうるエロティックな魅力が問題となっている」(G. Philippe, *«Ma mère. Notice»*, in *Georges Bataille Romans et récits*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 2004, p. 1304)。またエルンストはエレーヌの心理の分析にこの理論を適用している。「[...] ピエール・アンジェリックの母は他の主人公よりとは言わないもでも同じくらい「フェードル・コンプレックス」を表現している。というのも、エジプトへの逃避によって既に示された不安は、最終的には欲望に勝っているように思われるからだ」(G. Ernst, *Georges Bataille : Analyse du Récit de Mort*, PUF, 1993, p. 102)。
- 30) *M. M., O. C.*, IV, p. 222.
- 31) *Ibid.*, pp. 235-236.
- 32) *Ibid.*, p. 235.
- 33) *Ibid.*
- 34) *L'Impossible, O. C.*, III, pp. 97-223, *L'Abbé C., O. C.*, III, pp. 233-365. なお『C神父』における分身の問題についてはエリザベート・ボッシュの著作を参照のこと (E. Bosch, *L'Abbé C. de Georges Bataille*, éd. par Elisabeth Bosch, 1983)。
- 35) *L. S., O. C.*, VIII, p. 289.
- 36) *M. M., O. C.*, IV, p. 236.
- 37) *Ibid.*, p. 234.
- 38) フィッチもまた母と子の分身関係に注目しているが、この論文とはまったく視点が違う。彼は分身関係に「主体」と「主体」の関係があることに言及していない。また、ピエールの分身性について「母が熱心に唆したから、生理や生物の上での分身が精神心理上の分身に転換する」(B. T. Fitch, *«Ma Mère. Le texte initiatique»*, in *Monde à l'envers, texte réversible: la Fiction de Georges Bataille*, Minard, 1982. p. 121) と言っており、またエレーヌを話者のピエールが「精神的に二重化した結果」(*ibid.*, p. 125)の分身として考えている。しかし、登場人物どうしの分身関係と、物語る話者と物語られる登場人物との分身関係を、同じ土俵の上におくことはできるのであろうか。